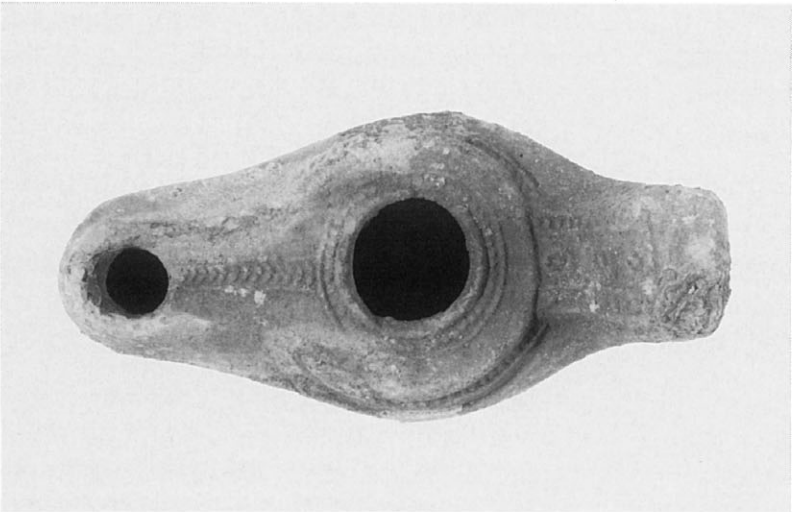
ISSN 1342−0380

金沢大学 資料館 だより

No. 10

KANAZAWA UNIVERSITY MUSEUM NEWSLETTER



西村コレクション
96JN52
土器ランプ

目次

金沢大学資料館所蔵考古学資料紹介（4）
伝ベツレヘム出土ランプ：2 ―― 2
小中屋文書「手習い本に見る須納谷村の教育」展 ―― 7
北陸人類学会群像 ― 宇野富良 ―― 8
新収蔵資料紹介 ―― 11
資料館彙報・50周年記念展示 ―― 12

―― 就任にあたって

本年4月から前資料館長の大橋信喜美教授のあとを引き継いだものの，どうも大変な時期に館長の任を引き受けてしまったようです。今後2年間の資料館は，半世紀にわたる貴重な歴史的資料を収集整理して展示するという大切な事業を兼務しなければならないからです。今後とも学内外に幅広く協力を呼びかけると同時に，記念展示をどう演出するかを思案しなければなりません。伝統ある金沢大学の歴史ロマンと夢のある未来の金沢大学像を浮き上がらせるべく，舞台裏ではすでに熱い議論と作業が開始されていますので，各方面の御協力をお願いいたします。

さて，この「資料館だより」も第10号の発行という実績に達しました。少ない紙面に窮屈そうに掲載される研究発表が気になるほど，最近では内容的にも充実の度を増してきています。次号からの新版「資料館だより」は，ずっと軽快なスタイルでの登場です。研究報告や論文については，来年度から隔年発行される「資料館研究紀要」（仮称）において，より充実した発表の場を設けたいと資料館運営委員会で了承を得ていますので，御期待，御協力ください。**資料館長・宮下孝晴　（教育学部）**

金沢大学資料館所蔵考古学資料紹介（４）
伝ベツレヘム出土ランプ：２

佐々木達夫[*1]，在田則子[*2]，波頭　桂[*1]

金沢大学資料館の考古学資料を研究や教育に活用するため，収蔵目録を作成している。今回は，先号にひきつづき西村見暁氏寄贈のコレクションから土器ランプを紹介する。西村コレクションは土器，ガラス器，青銅器から成り，土器には伝ベツレヘム出土のランプ57 点が含まれる。先にローマ時代からビザンツ時代6 世紀までの土器ランプ 29 点を取り上げ，12 点の実測図を掲載した［金沢大学資料館だより No.9:8-11，図 1,2 実測図番号 1-12］。以下にビザンツ／イスラーム時代の 28 点を紹介する。

紹介資料のうち，図 3,4,5 に実測図を掲載するものは，以下の資料館登録番号 96JN‥の後に 13 ～ 31 の実測図番号を付した。番号につづき，形の特徴，素地色，化粧土，成形技術，長×幅×高(把手含)cm，注油口径 cm，灯芯口径 cm，煤跡, 底部形状と底径 cm，把手，文様，推定年代を記す。

96JN52（実測図13） 把手が後方に伸びる細長い形のランプ，ピンク黄色素地，赤化粧土，型製，10.9 × 5.1 × 5.0，注油口径 2.7，灯芯口径 1.5，煤跡，輪高台：径 4.1 × 3.5，中が空洞となる厚みのある幅広把手に連珠文と三重円文，注油口沿いに連珠文，連続葉文，肩部に連続楕円文，把手の裏側に四本の細帯文。幅広の把手は，他の形のランプの把手のように上半分を成形する型で作られるのではなく，上部と下部の両方の型で作られる[Israeli 1988:168]。そのため上下を接合した後も把手内に空洞が残る。 5-7 世紀。この資料と同じ器形，似た文様で，把手に人面の浮文のあるランプが，アンティオキアから出土し 5-6 世紀と年代付けられ［Kennedy 1963:87］，またシリアでも作られた[Israeli 1988:167]。ユーフラテス岸の出土例は 6-7 世紀とされる[Israeli 1988:167]。

96JN43（14） 把手が後方に伸びるランプ，ピンク色素地，型製，8.9 × 5.0 × 4.3，注油口径 1.9，灯芯口径 1.6，煤跡，平底：径 2.7，空洞の厚い把手に線文，注油口沿いに連珠文，十字文，把手に細帯文，5-7 世紀。

96JN44（15） 把手が後方に伸びる細長い形のランプ，淡ピンク色素地，型製，10.0 × 5.8 × 4.2，注油口径 2.0，灯芯口径 1.5，煤跡，底径 3.2，中が空洞で厚みのある幅広把手，注油口沿いに円弧による花文，肩部におそらく葉枝文，把手に格子文，把手裏側に三本の細帯文，底部に花文。5-7 世紀。

96JN46 実測図 15 に似たランプ，淡ピンク色素地，型製，9.0 × 5.2 × 3.7，注油口径 1.7，灯芯口径 1.3，煤跡，底径 3.4，中が空洞となる厚みのある幅広把手，注油口沿いに楕円の連続による花文，底部は内湾し放射状線文が刻まれるようである。5-7 世紀。

96JN45（16） 把手が後方に伸びる細長い形のランプ，淡ピンク色素地，型製，10.7 × 5.2 × 4.2，注油口径 2.0，灯芯口径 1.3，煤跡，浅い輪高台：径 3.1，中が空洞で厚みのある幅広把手。把手上面の文様は人面にも見える。底面の線文は刻文のようである。5-7 世紀。

96JN42 実測図 16 に似たランプ，ピンク色素地，型製，9.6 × 5.2 × 4.4，注油口径 1.9，灯芯口径 1.1，煤跡，平底：径 2.6 × 2.2，中が空洞で厚みのある幅広把手，把手上面は丸く膨らみ，実測図 16 のような人面があった可能性がある。5-7 世紀。

96JN47（17） 把手部分が後方に張り出す細長い形のランプ，ピンク色素地，型製，10.9 × 5.4 × 4.2，注油口径 1.8，灯芯口径 1.2，煤跡，浅い輪高台：径 3.5，円錐形状の把手，肩部に連続楕円文あるいは葉枝文，底部に円文，5-7 世紀。

96JN41 実測図 17 に似たランプ，淡ピンク色素地，型製，9.1 × 5.5 × 4.5，注油口径 2.0，灯芯口径 1.0，煤跡，浅い輪高台：径 3.3，円錐形状の把手，注油口の円形を方形文が囲む。5-7 世紀。

96JN40（18） 把手が後方に伸びる楕円形ランプ，ピンク黄色素地，型製，8.0 × 4.7 × 3.2，注油口径 1.4 × 1.1，灯芯口径 0.9，煤跡，丸底，注油口と灯芯口を結ぶ帯文，全体的に不整形，ビザンツ／イスラーム時代。

96JN37（19） 卵形ランプで上面が丸みを帯びる。淡ピンク色素地，型製，9.1 × 5.5 × 3.2，注油口径 2.2 × 2.0，灯芯口径 0.9，煤跡，浅い輪高台：径 3.2cm，丸底，後方に短く伸びる把手，注油口から灯芯口にかけて複数の細帯文，肩部に葉枝文，7-8 世紀。

96JN36（20） 卵形ランプで上面が丸みを帯びる。ピンク色素地，型製，8.8 × 5.7 × 3.2，注油口径 2.1，灯芯口径 1.4 煤跡，丸底，後方に短く伸びる把手，肩部にジグザク文，7-8 世紀。

96JN24 実測図 19,20 に似るがやや器高の低いランプ，ピンク色素地，型製，(7.9)× 5.7 × 2.7，注油口径 2.0，灯芯口径 1.0，煤跡，丸底，肩部に放射状線文，小円文による円形花文，7-8 世紀。

96JN50（21） 把手が後方に伸びる卵形ランプ，焼き締まったピンク色素地，型製，10.1 × 6.1 × 5.1，注油口径 2.8，灯芯口径 1.1，煤跡，輪高台径 3.0 × 2.6，先端が動物（鳥?)の頭のように見える上方に長く伸びる把手，把手の先端は指で成形［Day 1942:74］，連続斜線文，および蔓巻文状の円文と渦文。この資料の製作地と年代について。同じ種類のランプで銘文をもつものがある。キリスト教（ギリシア語）銘文[Israeli 1988:156]や，アラビア語で 8 世紀の年号，陶工銘，ジェラシュ Jerash(Gerasa)が製作地であることを記した銘文が知られる。ジェラシュはアンマンの北 50km にある遺跡で，型とともにランプが出土した［Day 1942:74］。アラビア語銘文にはヘジラ暦 125 年（西暦 741-742 年，ウマイア朝），H.129（A.D.746-747 ウマイア朝），H.135（A.D.753 アッバス朝）の文字が認められる[Day 1942:74,77-78, Abdel-Jail'Amr 1986:148]。

これらの銘文を施されたランプは注油口から灯芯口にかけてのランプ上面に帯状に凹んだ部分をもつタイプで，96JN50 のように上面に渦文の施されたタイプのほうがおそらく年代は古い［Day 1942:77］。96JN50 は 7-8 世紀のウマイア朝期のジェラシュ製であろう。

96JN39 (22) 卵形小型ランプであり，注油口と灯芯口を洋梨形の稜線（凸線）が囲む。ピンク黄色素地，型製，6.6 × 5.2 × 3.5，注油口径 1.4，灯芯口径 1.0，煤跡，輪高台径 2.9，四角錐形小把手，肩部に葉枝文，7-8 世紀。実測図 22，23 に形や文様が似た資料で，注油口と灯芯口の間の平坦部に十字文をもつものもあり，ユーフラテス域や北東シリアで多く出土するという［Israeli 1988:170］。シリアのウマイア宮殿 Jabal Usayr からも同じ器形の資料が出土する［Chateaux Omayyades de Syrie pp.16-17］。

96JN38 実測図 22 に似たやや不整形な小型ランプ，ピンク黄色素地，型製，7.4 × 5.1 × 4.1，注油口径 1.7，灯芯口径 0.9，煤跡，輪高台径 2.4，円錐形小把手，肩部に連続斜線文，7-8 世紀。

96JN51 (23) 細長い卵形ランプで，注油口と灯芯口を洋梨形の稜線（凸線）が囲む。焼き締まった赤色素地，型製，10.6 × 6.6 ×(4.2)，注油口径 2.4，灯芯口径 1.3，煤跡，輪高台径 3.8，高台内部に動物の浮文，先端部欠損の円錐形把手，肩部に連続短線文，7-8 世紀。

96JN48 実測図 23 に似るがやや小型のランプ，焼き締まったピンク色素地，型製，8.5 × 5.1 ×(3.8)，注油口径 1.9，灯芯口径 0.9，煤跡，輪高台径 3.2，円錐形把手が欠損，肩部に連続短線文，注油口と灯芯口の間に十字文，7-8 世紀。

96JN49 (24) 先の尖った卵形ランプで，注油口と灯芯口を稜線（凸線）が囲む。淡ピンク色素地，型製，9.4 × 6.2 ×(3.6)，注油口径 2.2，灯芯口径 1.5，煤跡，輪高台径 3.0，高台内部に十字文，先端部の欠損した円錐形小把手，肩部に連続斜線文，上面平坦部に斜線文または葉文，7-8 世紀。これと似た資料が初期イスラームの宮殿 Khirbat el-Mefjer の 747 年の地震による破壊の層から出土する［Israeli 1988:154］。地震後の部屋で出土し，蔓草を伴う植物文が施される Khirbat el-Mefjer type と呼ばれるランプ［ibid.］は，当コレクションには含まれない。

96JN53 (25) 卵形ランプで，注油口と灯芯口を稜線（凸線）が囲む。赤色素地，型製，10.4 × 6.3 × 4.8，注油口径 2.5，灯芯口径 1.5，煤跡，卵形の高台 L=7.7，内側にやや湾曲する把手に三本の細帯文，肩部にジグザグ文，注油口と灯芯口の間に細帯文，8 世紀。内湾する把手や卵形の高台は，上述の Khirbat el-Mefjer type にも見られる特徴である。

96JN13 (26) 丸みを帯びた卵形ランプで，注油口を囲み灯芯口につながると思われる稜線（凸線）がある。重い灰色素地，型製，(9.0)× 7.1 × 3.3，注油口径 2.7，灯芯口部欠損，輪高台径 3.7，小突起把手，肩部に蔓巻文と曲線文，7-8 世紀。

96JN54 (27) 卵形の大型ランプ，ピンク色素地，型製，12.0 × 8.9 × 4.4，注油口径 1.8，灯芯口径 1.5，煤跡，卵形の低い高台 L=5.5，内側にやや湾曲する把手が欠損，文様無? 損傷? イスラーム前期，8 世紀以降。

96JN58 実測図 27 のようなランプの下半分が残る。ピンク色素地，型製，11.5 × 8.0 ×(2.8)，煤跡，卵形の高台 L=8.0，イスラーム前期，8 世紀以降。

96JN56 (28) 注油口の高い円形ランプ，ピンク色素地，型製，10.7 × 8.7 × 5.0，注油口径 2.7 × 2.3，灯芯口径 1.2 × 0.9，煤跡，浅い輪高台：径 4.0，環状帯把手（貼付），ビザンツ／イスラーム前期。

96JN55 実測図 28 に似るがやや小型のランプで，外周部は欠損。ピンク黄色素地，型製，8.0 ×(4.4)× 5.0，注油口径 2.5，灯芯口径 0.9，煤跡，平底：径 3.4，環状帯把手（貼付），ビザンツ／イスラーム前期。

96JN9 (29) 注油口の高い円形ランプ，赤色素地，ろくろ製，(9.0)× 7.9 ×(4.6)，注油口径 2.2，灯芯口径 1.1，煤跡，環状帯把手（貼付）が欠損，文様無，ビザンツ／イスラーム前期。ろくろ製ランプはローマ時代に消滅したが 5 世紀に再び現れ，イスラーム時代にも作られた［Sussman 1987:12, Israeli 1988:177］。

96JN1 (30) 注油口の高い円形ランプ，赤色素地，ろくろ製，8.2 × 6.4 ×(3.9)，注油口径 2.0 × 1.5，灯芯口径 1.3，煤跡，環状帯把手（貼付）が欠損，5-8 世紀。

96JN2 (31) 注油口の高い円形ランプ，赤色素地，ろくろ製，(7.6)× 5.9 ×(3.8)，注油口径 1.7，灯芯口径約 1.1，環状帯形把手（貼付）が欠損，文様無， 5-8 世紀。

96JN10 半球形ランプ，ピンク色素地，型製，8.8 × 7.3 × 4.4，注油口径 3.0，灯芯口径 0.6，煤跡，文様無，年代不明。

参考文献

Abdel-Jalil'Amr 1986 Two early Abbasid inscribed pottery lamps from Geras. Zeitshrift des Deutschen Palastina-Vereins pp.146-149

Day,F.E. 1942 Early Islamic and Christian Lamps. Berytus 7:65-79

Israeli,Yael & Avida,Uri 1988 Oil-Lamps from Eretz Israel: The Louis and Carmen Warschaw Collection at the Israel Museum,Jersalem.

Institut du Monde Arabe 1990 Chateaux Omayyades de Syrie.

Kennedy,Ch.A. 1963 The Development of the Lamp in Palestine. Berytus 14:67-115

Sussman,V. 1982 Ornamented Jewish Oil-Lamps: from the destructions of the second temple through the Bar-Korkhda Revolt (Jerusalem)

（1．文学部　考古学
2．資料館）

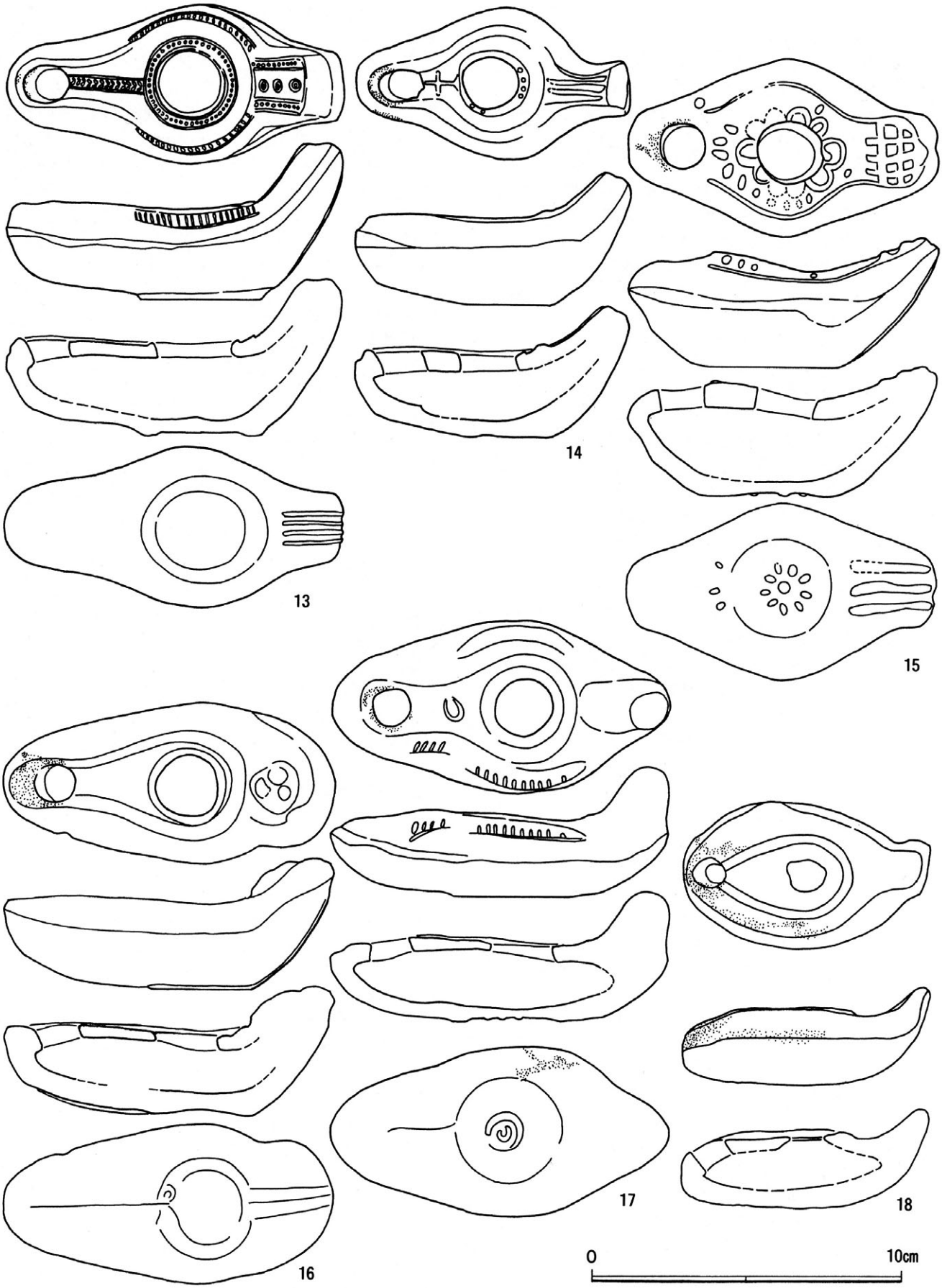


図 3　伝ベツレヘム出土ランプ

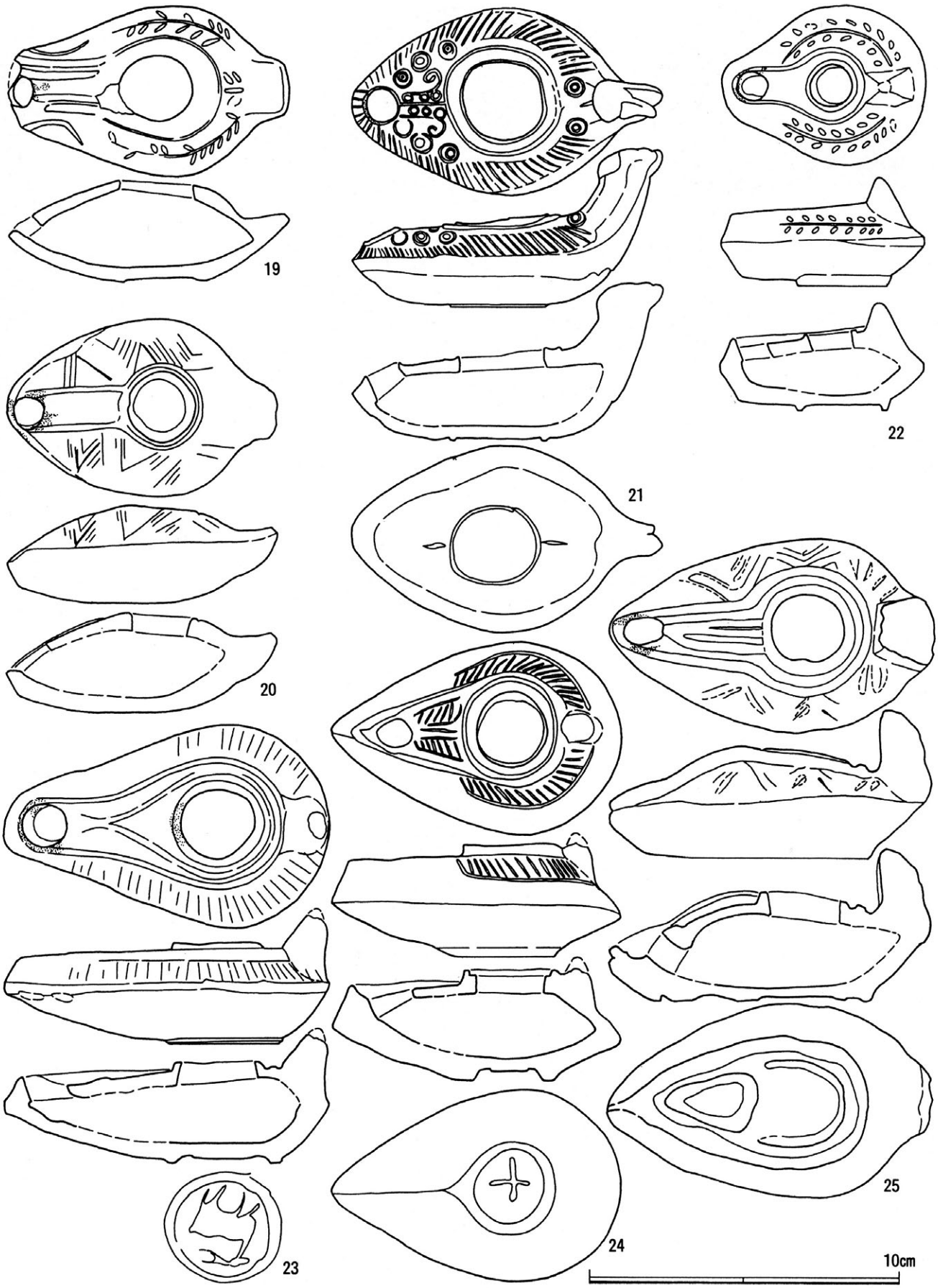


図4　伝ベツレヘム出土ランプ

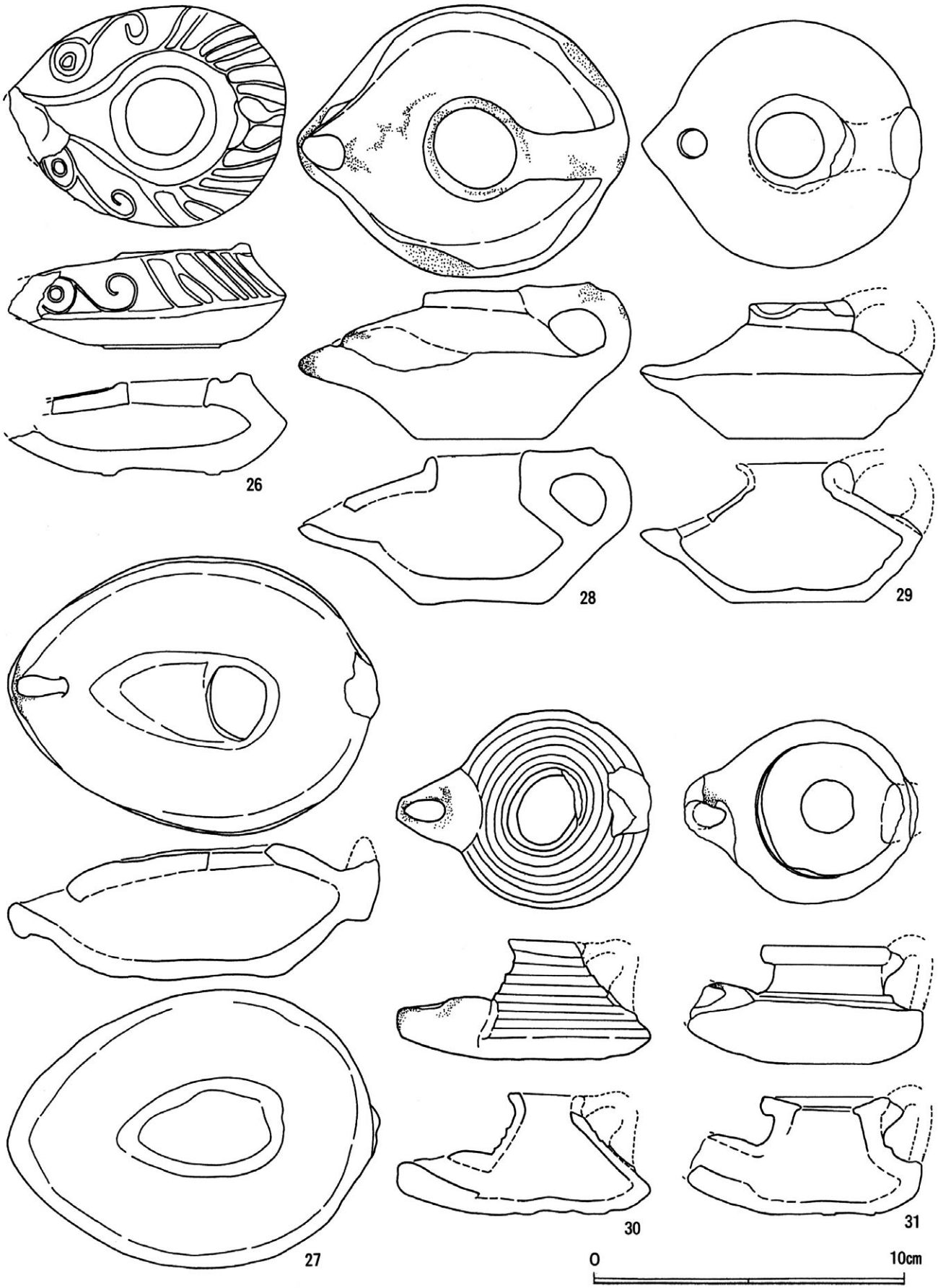


図5　伝ベツレヘム出土ランプ

小中屋文書
「手習い本に見る須納谷村の教育」展

橋爪直子

昨年4月から，本学文学部史学科開講の博物館実習が資料館で行われている。資料の扱いや展示に関することなど，様々な作業に学生が積極的に関わることができるよう心がけ，昨年 10 月には当館所蔵の「小中屋文書」を用いて学生が企画した展覧会が開催された（「白山麓幕府領の支配と生活」展，資料館共催）。

今回の展覧会も今春から実習を行ってきた学生が構成したもので，前回と同じ「小中屋文書」を使用しながらも，別の視点からテーマを定めた。

310 点を数える小中屋文書は内容形態によっていくつかに分類されるが，その中では学芸分野の多いのが特徴で，これを今回のテーマとして取り上げた。この分野は先号において宇佐美孝氏（金沢市立玉川図書館・資料館客員研究員）が報告されており，今回の展示の参考とした（「『小中屋文書』の「手習本」分類史料の内容」，『資料館だより』No.9）。

目録中，手習い本及び雛形として分類される当該分野の文書は 130 点存在する。これらを展示ではさらに細かく分けてみた。

まず，読み書きの初歩的なものが挙げられる。文書中にあるいろは手本では，末尾に「京」，そして「一」から「十」までの数字表記が見られる。このような形はいろは手本の代表的な例である。

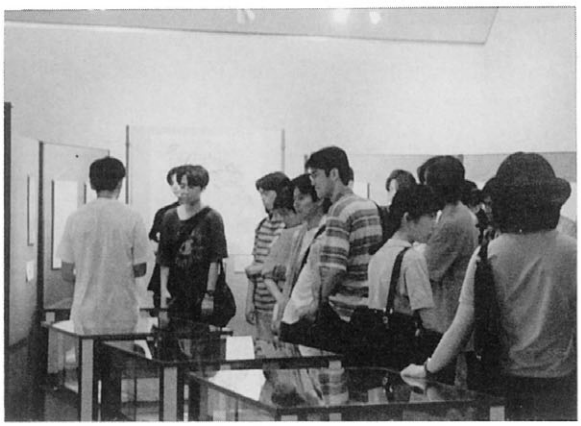
最も一般的な手習い本と言えるであろう往来物は，平安期から使われた書簡集の形を取る初等教育書である。往来物は文字や手紙文の書式のみを学ぶものではなく，その内容から政治・経済・文化など，様々な分野のことを学ぶ工夫がなされている。小中屋文書では宇佐美氏が指摘される通り，差出人や宛先，内容が須納谷村の日常生活に密着したものとなっており，また庄屋である小中家の役割を確認するものとなっている。例えば，須納谷村が含まれる幕府領白山麓 18 ヶ村の各村をはじめとした近隣諸地域の名称が頻繁に現れるほか，林業，絹織物業など地域の重要な産業に関わる往来手本が多い。

さらに廻状と呼ばれる，村々が順次回覧していく形をとる文書の手習いがある。その中では代官交替に際した各村庄屋の招集，年貢割付や博奕禁止令のテキストなどがあり，村役人である小中家の役割をうかがわせている。

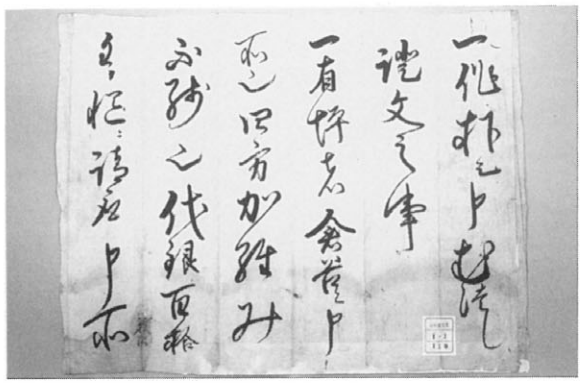
地域密着の型ではなく，おそらくいわゆる教養を高めるために使用されたものであろう文書も存在している。百人一首の持統天皇の和歌や，梶原景時の讒言によって失脚した源義経の発給した書状などが代表的なものであり，特に後者では義経が小中家の人間に宛てた形をとっている。読み書き，歴史教育の教本であるとともに，真偽はともかく，義経と関わりを持つ「小中家」の人間としての自覚を促す効果もあったのではないだろうか。

手習い本はこのように，現在の私たちにも当時の教育や地域の生活の実態を教えてくれるのである。

なお，本展覧会に関わる実習生は以下の通りである。阿部雄一・天野琴美・岡田　妙・石垣知倫・石黒園子・佐塚勝之・寺林泰昌・野澤恭子・原田亮男・樋本真希子・堀　好晴・室千奈美・山崎由紀子・渡辺佳代子。開催期間は 1997 年 6 月 23 日－6 月 27 日（13 時～ 16 時）。展示に使用した文書は 14 点。その他，地図や江戸時代の教育について解説したパネル等を 11 枚展示した。また 26 日，27 日には実習生によるギャラリートークを行った。（資料館）



会場風景　平成9年6月



「一作卸むつし証文之事」

展示品の一点。「むつし」は白峰地方特有の焼畑農法のこと。

北陸人類学会群像 ── 宇野富良

在田則子

はじめに

明治２９年５月刊行の『北陸人類学会志第一編』に「金沢附近浜海石土器発見景況」と題する遺跡の踏査報告が掲載されている。報告者は宇野富良（うのとみすけ），河北潟と日本海に挟まれた一帯の砂丘地で粟ヶ崎・大根布付近を主なフィールドとし，明治２２年の夏以来百回に及ぶ踏査を行った人物である。(注１)

粟ヶ崎・大根布を中心とする砂丘遺跡からの採集遺物の一部は金沢大学資料館に「四高考古資料」として保管されていることは本紙第７号で述べたとおりである。宇野は北陸人類学会の創設と活動に深く関わった。小稿では宇野の人物像に触れてみたい。

1. 加賀藩士宇野富良

宇野は加賀藩士で代々鷹匠を務める家系に生まれた。金沢市立図書館所蔵の宇野家の『先祖由緒並一類付帳』によれば，宇野は金沢小立野鷹匠町父宇野大作方に住み，年齢２７歳とある。(注２)

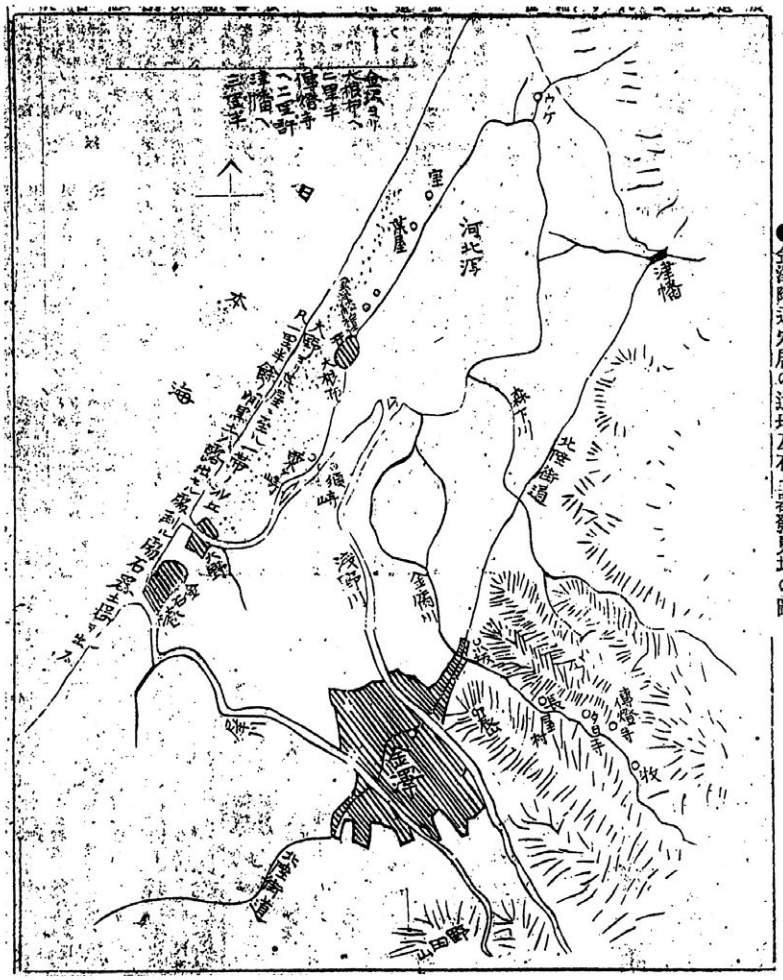
宇野の父大作の七世祖父四郎右衛門は加賀藩３代藩主利常の代に鷹匠に召し出され，五世祖父七郎右衛門の時新知百石を得た。また，宇野の叔父には加賀藩に招聘された洋式兵学者佐野鼎の義弟である宇野直作がいる。宇野の父大作は海防方大筒照準役等砲術方を勤めている。

宇野は，安政３年に御鷹方として加賀藩に初めて雇用され，同５年には御歩並御鷹役に召し出され，切米３０俵を得ている。文久３年には海防方臨時大筒照準役等を務めている。

元治元年１２月，水戸天狗党の上洛を阻止するために加賀藩は出兵しているが，その際，宇野は砲兵として出陣している。

宇野は藩の命により慶応元年から京都警護にあたるが，同３年１月金沢に帰り，壮猶館入塾を願い出る。同年３月壮猶館に入塾，英学を学んだ。壮猶館では稽古方指引等を勤めていたが退塾し，維新前夜の京都に向かい，「凝花洞前御固所」で京都警護にあたる。翌慶応４年１月鳥羽伏見の戦い後，朝廷は加賀藩に命じ在京の藩士に橋本関門（八幡市）を固めさせるが，宇野はこれにも加わっている。同年閏４月金沢に帰り，砲術教授役，少属大砲隊翼長等に任ぜられた。

明治２年末宇野は大阪兵学寮に学ぶため金沢を発っている。大阪兵学寮は，明治２年９月新政府により創設されたもので，同年１２月から新生徒を入学させこれを青年舎とし，歩・騎・砲の士官を養成した。陸軍士官学校の前身である。明治３年１月４日に宇野は入寮し，砲術を学んだ。以上が由緒帳による宇野の経歴である。



「金沢付近穴居の遺址及石土器発見の図」『北国新聞』明治 28 年９月６日付

宇野富良
「明治37年度親睦会」
『金沢日本基督教会五十年史』
(金沢日本基督教会編，昭和５年)
から転載

ところで，河北潟と日本海の間の砂丘地と宇野を結ぶものに，宇野の父宇野大作富素の由緒帳にみえる白鷹捕獲の一件がある。

安政４年，加賀藩の鷹匠宇野大作富素は，砂丘地河北潟中央部に位置する黒津船権現森に現れた白鷹を捕獲するよう藩主の命を受けた。大作は砂丘地河北潟北部の荒屋の小祠に祈願し，ついに白鷹の捕獲に成功した。大作はこの時の神徳への報恩のため藩主に出願し，この小祠に社殿を新たに造営し，黒津船の西宮を勧請し蛭児神社としたという。宇野自身は前述のように安政３年に藩の鷹方となっており，翌４年の白鷹捕獲には父に協力していたことだろう。また砂丘地南部の粟ヶ崎には藩主の休息のための御旅屋があり，放鷹がしばしば粟ヶ崎で行われていることからも，宇野は維新以前に何度も砂丘地を訪れていると考えられる。

なお蛭児神社を勧請した神職は，当時石川郡五郎島にあった小浜神社の斎藤政矩である。宇野と同じく砂丘遺跡での採集活動を行った北陸人類学会員斎藤義基はこの斎藤家の子孫である。

2. 軍人宇野富良

金沢市野田山に宇野家の墓所がある。宇野の夫人柳の墓碑があり，ここに刻まれた銘文によって明治初年以降の宇野の足跡を知ることができる。これによると明治５年砲兵将校となり大阪に在職，明治１０年には西南戦争に参加している。

宇野は，薩軍の熊本城包囲を解くために明治１０年３月に背面攻撃軍として編成された別働第二旅団に加わった。熊本城に敗れた薩軍は人吉で再起を図るが，別働第二旅団を中心とする政府軍はこれも陥落させる。この人吉戦で砲兵隊を指揮する司令官の中に「宇野富良大尉」を確認する。(注３)

宇野は西南戦争後は，明治１４年に東京へ，同１８年に仙台へ転任し，同２１年休職し金沢に帰っている。

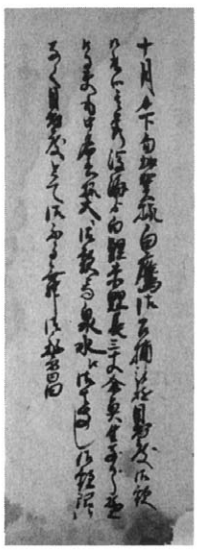
なお金沢では明治８年に名古屋鎮台歩兵第七連隊が置かれているが（第七連隊は明治３１年に第九師団に編入)，当時粟ヶ崎は陸軍の演習地であり，明治４１年には演習のための陸軍廠舎が建てられている。

3. 北陸人類学会での活動

明治２８年９月７日，「北国新聞」に前日までの人類学関連の記事に寄せて次のような投書が載る。(注４)

「此頃貴社新聞紙上に石器発見に付ての記事を散見せるが余も又一話を投ぜん」以下粟ヶ崎大野間，金石の西方犀川左岸の遺物採集をここ数年来行ってきていると述べている。この投書の主は「宇野生」となっており，これが人類学会の設立者の須藤求馬と宇野の出会いであると思われる。宇野は学会の創設時には１２人の発起人の中に名を連ね，評議員として会誌編集などの事務にあたり，転勤で入れ替わる会員の多い中，地元の会員として北山重正らと会の実質的な運営を支えていた。

『北陸人類学会志』の発刊の辞には，開発により遺物遺跡遺風遺俗の消失する危惧から早急にこれらを調査研究する必要があり，この研究を志す者の情報交換の場として刊行に至った旨が明らかにされている。発会式に寄せた論説で坪井正五郎が人類の理学と明快に定義している人類学の対象は，この遺跡遺物遺風遺俗であった。民俗学的なものと考古学はこの時代では未分化であった。



「松島家文書」(11p 参照)にみられる安政４年の白鷹捕獲の記事。河北潟の白鯉赤鯉とともに藩主はこれを吉兆とした。

「四高考古資料」資料館蔵，「加賀国石川郡粟ヶ崎」との注記がある。

宇野は例会では砂丘遺跡の遺物を報告・供覧している。さらに宇野は金沢地方の方言に興味を持つようになる。明治３０年の第１５例会で北山重正が「方言取調に就き」と論述し，それを受けて宇野が「方言取調報告」を同年３月第１７例会から始めている。報告は明治３３年４月第４９例会の１０回目まで行われた。その成果をまとめたものが『会志』第３編と第４編「北陸地方々言，金沢方言」であろう。金沢地方でのみ行われ他の地方では通じない語・いわゆる俚言，および訛語の顕著なものを収集し，イロハ順，事象別に配列したものである。これらは宇野自身の内省により記録していったものと思われる。なお当時，帝国大学が各方面に委託し全国の方言の調査を行い，石川県の分は明治３４年に『石川県方言彙集』として刊行されたいきさつがあり，識者の間で「方言」が話題になっていたものと思われる。民俗学関係では宇野は明治３２年２月の第４０例会で「子供の遊戯に就て」という講演をしている。

時は下るが，大正１２年の「大根布付近の遺跡」『石川県史跡名勝調査報告第１輯』には，宇野と前述小浜神社(明治２２年に五郎島から現在の地大根布に遷座)の神職斎藤義基の砂丘遺跡における採集活動について記述があり，「宇野氏蔵」の遺物の写真が掲載されている。同報告巻末の遺物図版も宇野と斎藤の両者の提供であり，遺跡の調査には斎藤とともに宇野の協力もあったと考えられる。

4. 宇野富良の信仰

宇野富良には，基督教徒としての顔もある。宇野は明治２６年金沢で洗礼を受けているが，それは柳夫人の影響が大きい。再び柳夫人の墓碑銘を見てみよう。それによると，柳は明治１０年宇野とともに大阪に在住中，米国婦人宣教師アッキンソンに基督教について聞き，同１１年澤山保羅から洗礼を受けている。同１８年に移った仙台では基督教会及び同婦人会のために力を尽くし，同２１年金沢に帰る，とある。

さて金沢においては，石川県中学師範学校の教師として招かれた米国人宣教師ウインが，明治１２年基督教伝道を開始し，同１４年金沢市大手町に金沢教会を設立する。『金沢教会百年史』(1981) によれば，柳は同教会へ同２３年に転入している。『金沢日本基督教会五十年史』(1930)によると宇野は，明治末から大正初期にかけて２度の長老職,大正２年に創設された「金沢伝導会」では評議員を務めている。

『北陸人類学会志』にある宇野の住所は金沢市飛梅町７１番地である。当時飛梅町にはウインの家と（明治２１年 1888 建設)，ウインの設立になる基督教主義男子学校北陸英和学校があった。(注５)

なお，同教会には阿閉政太郎，四方田慶治，市村才吉郎らの北陸人類学会員の名がみえる。彼らの人類学会への入会は宇野の勧誘によると考えられる。阿閉は明治８年石川県師範学校小学師範科を卒業，石川県尋常中学校等で教鞭を執り，彼の蔵書の一部である「阿閉文庫」は四高図書の特殊文庫として本学附属図書館に所蔵されている。

昭和５年５月宇野の属する金沢教会では創立五十周年の記念事業が行われた。宇野は同年１２月２４日に永眠する。

注１　須藤求馬「加賀国石川河北二郡の石器」『東京人類学会雑誌第120号』明治 29 年

注２　後述墓碑銘によれば宇野は嘉永元年 1848 生まれ，由緒帳の成立した明治３年 1870 現在宇野は満２２歳である。実年齢と自称年齢の差はこの後一貫して５歳を保っている。

注３　「将校姓名便覧」『征西戦記稿附録』明治 20 年，参謀本部　「人吉口戦記」『征西戦記稿巻中』明治 20 年，参謀本部　「人吉陥落後の戦闘」『西南記傳中巻２』明治 42 年，黒龍会本部

注４　掲載した略地図は同紙明治２８年９月６日付である。

注５　明治１６年私立愛真学校として創立，明治１８年北陸英和学校と改称，明治２６年北陸学校と改称，明治３２年廃校。

石川県立図書館 室山 孝氏と石川県埋蔵文化財保存協会 三浦純夫氏の御協力をいただいた。　（資料館）

新収蔵資料紹介

日比野信一（ひびのしんいち）**教授肖像**

本作品は本学日比野信一教授の退官記念に同教授退官記念事業会が高光一也（たかみつかずや）画伯に依頼して制作された肖像画であり，本学理学部生物学教室に長く保管されていたものである。日比野信一教授は第四高等学校，東京帝国大学を卒業，長く台北帝帝国大学に植物生理学を専門として奉職し，終戦・帰朝後は金沢高等等師範学校教授に迎えられた。昭和 24 年国立学校設置法により同校が金沢大学に包括された際，本学教授となり同 28 年一般教養部長を勤めた後，同 29 年退官した。

高光画伯は，光風会及び日展で活躍した，豊かな感性とダイナミックな形態把握による人物描写でよく知られた画家である。昭和 38 年日展文部大臣賞，同 46 年日本芸術院賞を受賞し，また同 61 年文化功労者に選ばれ石川県のみならず全国的にその地位を確立している。そしてこの「日比野信一教授肖像」にも氏の充満した力感が感ぜられ，美術作品としても高く評価できる。

鶴羽松太郎（つるはまつたろう）**教授肖像**

本作品は本学鶴羽松太郎教授の退官記念に同教授退官記念事業会が竹沢 基（たけざわもとい）画伯に依頼して制作された肖像画であり，本学理学部生物学教室に長く保管されていたものである。鶴羽松太郎教授は，大正 12 年に金沢医学専門学校が金沢医科大学となり，同時に同校薬学科が同学薬学専門部と改称された際，翌 13 年に植物学教授として迎えられた。昭和 24 年国立学校設置法により同学が金沢大学に包括された際，氏は本学教官となり，同 33 年理学部教授として退官した。

竹沢画伯は光風会及び日展で活躍した画家で，石川県美術界にもよく貢献し昭和 57 年には金沢市文化賞を受賞している。画伯は人物描写に優れ，気品のある作風でよく知られる。本肖像画においても直線的気概が造形美を形成し，画伯の特長がよく表れた充実した美術作品となっている。

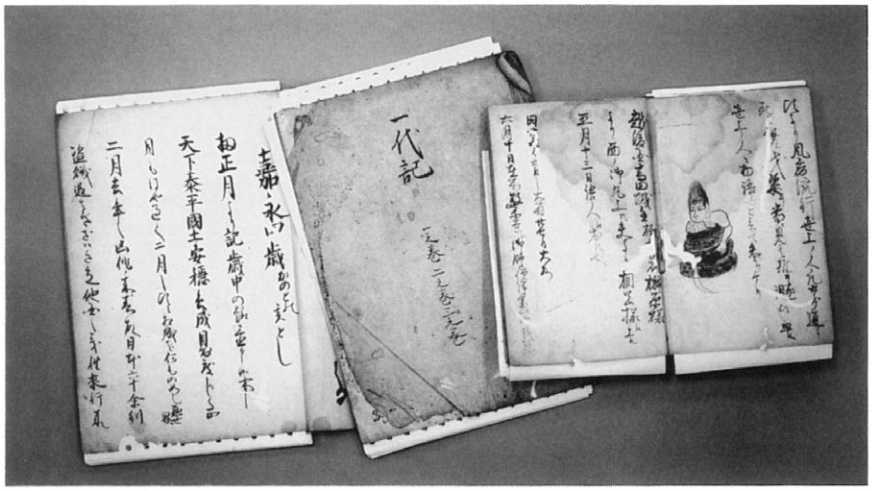
松島家文書

本資料は河北郡津幡町池ヶ原松島家に伝わる諸古文書，「一代記」「反別地価等書上」，「石山信長記」（写本），「能州末森戦記」（写本）を中心として手習本，浄土真宗関係写本，和歌・謡関係書等，冊子 55 点，一紙 2 点からなる。

本資料の中心をなす「一代記」は松島家先代松島喜太郎が，天保 7 年から明治 4 年までに収集した諸情報を記録したものである。弘化 2 年以降は，元治元年，慶応 3 年，明治元年，同 2 年を除いてそろっている。1 巻から 5 巻，7 巻から 18 巻，26 巻，27 巻まで現存するが，巻数が不明のものもある。（元治 2 年，慶応 2 年）。

内容は，天候，災害，作柄に関する記述が多い。また，たび重なる外国船来航，中央での政治的事件など主な社会情勢についてはおおよその情報が記載されており，加賀藩の一地方への情報伝達のあり方をうかがうことができる。加賀藩レベルでは 嘉永 5 年の銭屋五兵衛の投獄に至る河北潟死魚浮上事件，安政 5 年の卯辰山騒動等が記されている。

今後は補修・目録作成作業と平行して，「一代記」に記載された記事の項目化，「能州末森戦記」（写本）と「石山信長記」（写本）の考証，地方知識人と評価される松島家と地域との関わりの探求，ひいては情報の収集方法の推定等，いくつかのテーマで資料を掘り下げ，今後の閲覧・研究に備えるとともに来年度の企画展開催を目指したい。なお，「一代記」の内容については本学文学部文学研究科横井美里さんの協力を得た。



末尾ながら，貴重な資料を寄贈して下さいました松島義久氏及び松島寿彦氏に深く感謝いたします。

資料館彙報（平成９年４月～平成９年７月）

●４月　大橋信喜美前館長の任期満了にともない，後任として宮下孝晴・教育学部教授が館長に就任した。

●５月　韓国国立全州博物館 学芸研究士（石川県立歴史博物館 研修員）の李在烈氏が来館し，当館所蔵の朝鮮半島出土遺物の調査を行った。

●６月　文学部（博物館実習及び資料館主催の「小中屋文書　手習い本に見る須納谷村の教育展」を開催した（６月23日－６月27日）。

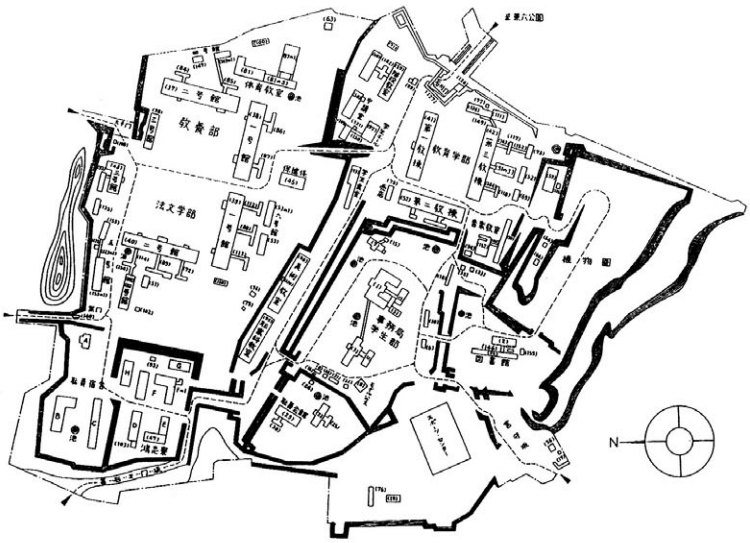
●７月　高光一也「日比野信一教授」（油彩画F12）及び竹沢 基「鶴羽松太郎教授」（油彩画F12）の収蔵（各教授退官記念事業会からの寄贈受入）が決定した。

●７月　石川県津幡町の松島氏所蔵の「松島家文書」の収蔵が決定した。

●７月　福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館の特別展「眠りからさめた戦国の城下町」のために阿弥陀如来像及び経筒の蓋を出品した。

tempus fugit

金沢大学本部構内建物配置図　S・1：2400



城内キャンパス建物配置図

（昭和36年当時）

「歩兵第七聯隊兵舎」を教養部，法文学部，教育学部に，「第九師団司令部」を事務局に等，旧陸軍の建造物を大学の施設に利用している。理学部校舎が城内に新設されるのは昭和39年，それまでは旧第四高等学校校舎を使用した。図書館は，昭和25年に金沢城の遺構三十間長屋に隣接して建てられた「暁烏文庫」におかれ，三十間長屋は書庫にあてられていた。

展示室を公開しています。見学を御希望の方は資料館準備室(264-5215)に御連絡ください。随時，御案内します。

金沢大学　資料館だより〈第10号〉

発行日：平成９年９月１日　　印刷：田中昭文堂印刷株式会社

発行所：金沢大学資料館　　〒920　金沢市小坂町中75

〒920-11 金沢市角間町 Tel 076-264-5215　　TEL 076-252-7788